

チェンマイ大学での貢献 (93)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では筆者自身の「名前」について記す。定年退職をしてからの人生をどの様に生きるかは、個々の人間にとってまちまちである。大きな目的を建て、さらに飛躍したいと考える人もおれば、このあたりでゆっくり休息をして余生を楽しむと言う生き方もある。まだまだやりたい事があるので、もう少し頑張りたい、など種々雑多である。しかし定年退職後にどの様に過ごすか、をいくらかでも頭に置き、考えておくことは余りにも急激な日常生活の変化に遭遇し、その変化の速さについていけなかったり、あるいは戸惑うことが、精神的にも不安定となり、それがもとで健康までも調子を狂わせ、思わぬ結果に遭遇するなどと言うことにも成りかねない。大学の定年退職の年齢は大学により異なっていたが、年金問題などの浮上と共に、殆どの大学では定年退職の年齢はおよそ65才が一般的になって居るようである。63才での定年退職では年金がカバーされず、さらにもう2年間、某かの身分で再雇用する方策が大学で採られるようになった。もちろん定年延長では無いから処遇も在職時とは大きく異なり、日常勤務も必ずしも毎日という必要もなくなった。言うまでも無く、大学により対応は異なるので一概には言えないが大体その様である。特任教授やそれに近い身分を用意して対応する例も少なくない。筆者の場合は63才での定年退職で一線を退いたが、大学の関係部署のご厚意により、2つのポストを用意して頂いたことは、これまでも記したと記憶する。1つは工学部のリサーチ・フェロー (Research Fellow)、もう一つは大学レベルの国際交流課客員教授 (Visiting Professor) であった。この頃大学は独立行政法人化 (University Autonomy) に移行し、上記の様な「特任教授」などのポストについての処遇や扱いについては余り知る人は少なく、給料やそれに相当する手当等についてはあまりはっきりとした規則は無かったようである。筆者自身もそうしたものを頂いた記憶は全く無い。ただリサーチ・フェローという身分では毎日大学に行き、与えられた居場所であるオフィスに出向き、これと言った義務や仕事がある訳でも無いが、時には行事に参加、あるいはこうした行事の手伝いなどがメインの仕事 (Main job) であった。オフィスにある事務機器や電話は利用することができた。国際交流課の客員教授という身分では、殆ど決まった仕事も、相談や会議にも一度として出席の要請も無く、もちろん上記した様に手当などもない。まさに名前だけの名誉職 (?) だったかに記憶する。貢献度が少ないのに機会を頂いたことに感謝すべきであると心得ている。ご高配を頂き、折角の労働のチャンスを頂いたにも拘わらず、不平にも似た愚痴を言うのは、いささか申し訳ないことは承知しているが、当時はその様な時代であったと思えば、それはそれで受け入れることもできるが、ここでは事実を話す事にとどめる。2年目もかろうじてリサーチ・フェローとして居残る機会を頂いたが状況が変わった訳では無い。そのうちにチ

エンマイ大学からのお誘いがあり、後半からタイに移動したが、扱いは殆ど変わらず、ここでも無給ではあったが宿舎は用意頂いた。LAN (Local Area Network) ケーブルの設置も最初は有料になりかけたが、設置時期になって相手側の配慮で無料となった。いくら何でも、無給であるのにLANケーブル設置までも自己負担というのはあまりにも失礼ではないかとの配慮も働いたと想像する。ちなみにその時の設置料は年間8、000THBと高価であり筆者自身も1年間滞在するという確約も無く、無給の上に「これほど高価な経費を自己負担せねばならないのか」と正直思ったが、さすがに大学側での負担免除の配慮が働いた。なぜ初期の半年ほどが無給であったかは、知るところでは無いが「雇用試行期間」と正式な書類準備までの待ち時間の意味らしい。幸い現職時代に頂いた委任経理金(奨学寄付金)がいくらか日本の大学側に残っていたのでリサーチ・フェローとしての身分が有効に機能し、支給頂いた。ここまでは定年退職後の当時の状況を敢えて紹介し、参考に資して頂ければ幸である。この2年間の筆者の三重大学での貢献(?)はインターンシップ(International internship)で2名のタイの大学からの学生受け入れに協力頂いた企業を訪れ、受け入れに対するお手伝いをさせて頂いたことである。また一方では同僚(事業の相棒)の教員の定年退職に伴う祝賀会に、国際シンポ(International symposium)を企画し、タイと中国からの学長、国際交流部長を含む10名余の教員を招いてのイベントを企画したことである。一般に協定を締結しているとは言え、大学のひとりの教員の定年退職記念事業に、協定大学の学長や国際交流部長が個人的に出席することは希であり、この事を漏れ聞き、耳にした学長は各大学(江蘇大学、チェンマイ大学)からの要人(Very Important Person)4名(学長2名、国際交流部長2名)を大学として正式に招待すると言う対応をさせて頂きたいとの申し出(意志表示)を頂き、こちらもいずれは4名のゲストを正式(公式)に事務局にお連れし、学長には紹介や歓談、祝賀会への出席をお願いせねばと考えていたが、大学に経費負担をお願いするなどとは全く思っておらず、突然のご高配による申し出に深謝し、2つの大学の学長と国際交流部長を大学経費でお招き頂くこととなった。この事を相手大学に伝えると「正式な形での招待に感謝する」との返事が返ってきた。その時の学長の適切な御判断には深く感謝している。こうした事に対して迅速に決断できない管理者が多いことも事実である。筆者のためには無く、招かれるゲストの立場を考慮した対応だからである。やはり形やうわべでは無く、真剣(本気)での取り組みでなければ人の心は動かせない、良き一例である。この意味は招待される側からすれば、大学レベルでの交流協定を締結し、長年交流事業を通じて友好、相互理解を推進してきた間柄であれば、1教授の定年退職記念事業といえど招待する側が大学レベルであることが如何に荣誉であるか、あるいはそれが一般に社会的エチケット、あるいはマナーであるか、と考えるとやはり大学レベルである方が招待される側にとってはより有り難い事である。この学長の申し出を相手側に伝えたときに、その中の一人は「大学としての正式な招待を頂き感謝する。われわれの記念事業への大学からの公式招聘になった。」と言われた。文章ではこの表現に尽きるが、その中に含まれる感情的意味は「やっと大学レベルの招待になったか」と

言うニュアンスにも似た囁きもあった。もちろん主催者である筆者側が招待に必要な経費の全てを負担するとして、表面的に大学が招待するという形もあるが、そうした内幕もなく、「学長が相手大学側の学長と国際交流部長の4名（江蘇大学、チェンマイ大学から学長と国際交流部長の各大学2名）を三重大学側で招待させて欲しい」と申し出て頂いたご高配に本当に感謝している。招待された相手大学の4名も、さぞ満足されたことと確信する。

ところで本報では「自分の名前」について書くことを明言した。なぜか？と言うと、常日頃から言っているように、自らがこの世に生を受けたことから「何を自らのミッション(Mission)とするか、自分は何の為に生きておられるのか（あるいは生かされているのか）」と言う事に固執してきた。「金銭には関係なく、何をすべきか、何がこの世の中における自分の果たすべきミッションなのか、さらに、ではどの様にすべきか」と自問してきた。それなりのものを思考し続けても、なかなかはっきりとした答えは見つからない。そこで思い立ったのが、多分この世には同姓同名でなくとも同名の他人が何人か存在するのではないか、ならば彼らがどのような生き方を選択、決心して生きたか、あるいは生きているかを覗いてみるのも為になるのではないかと。またその勇気を貰い、気力を倍にして自らを奮い立たせ、あらたな生き方を知る可能性もあるのでは・・・」と考えた次第である。また自分をこの世に送り出した両親がどのような想いで、あるいは希望で名前をつけたのか、どのような将来的期待を持ってその様な名前を、あるいは将来像を持ってその様な文字を名前として付けたのか、と言った背景が有るのではないかと想われる。生きる本人も、できればそうした背景を知っていることは決して悪いことでは無く、むしろ大いに参考に為て、如何に人生を有益に生きるかを決する意味もある。そうした背景に沿った生き方ができるかどうかは別として、知っていればそれなりにその方向に向かって生きようと努力する事も出来る。

また、たまには生きる目的を見失ったり、路頭に迷うこともある。そうしたときの方向を見いだす「のろし(Beacon)」としての役割も果たしてくれる。このような背景に立って話しを進める。

先ず、筆者の姓の「伊藤」は「伊勢地方」の「藤原」を意味するらしい。名前の「信孝(のぶたか)」は文字通り、「人を信じ、親や目上の人を敬い、孝行を尽くす (Believe in others, respect parents and superiors, and do the best)」と理解し、自らの名前が持つ意味を尋ねられたときは上記の様に説明している。しかし時々冗談を交えてその場をなごませるために努力している。すなわち「私の名前は不信感の「信」に「親不孝」の「孝」と書きます」と紹介している。笑いを誘うテクニック(?)でもある。英語では「Nobutaka Ito」と言い、上記の英語の意味を付け加えている。しかしタイではタイ語の方が、より親しみを感じて貰えるので「ナワタカン イットー (นวัตกรรม อีโต้)」と紹介している。ナワタカンとは「技術革新」を意味し、イットーは大きなナイフで「肉切り包丁」のごときものを指す。工学を専門としているので「大きなナイフで技術革新を成す」と言う意味で「นวัตกรรม by อีโต้」と言って、同じように親しみを増す紹介を付けている。名前の「信

孝」を構成する「信」と「孝」なる文字を意識しだしたのは中学生の頃、折しも時の人気映画スターとして売り出した東映の中村錦之助や東千代ノ介が出演する、滝沢馬琴作の「南総里見八犬伝」にこの2文字が含まれていたからである。すなわち「仁義礼智忠信孝悌」の8つの文字の2文字がそれである。「犬」の文字で始まる名字を持つ8人の剣士が上記8つの文字の一つを刻んだ「水晶玉」を有し、協力して悪に立ち向かう内容である。今まで知らなかった者同士がこの文字を刻んだ「水晶玉」の存在で、「同志」としての因縁を悟り協力すると言う筋書きである。親近感を生む、仲間意識が安心感と危機感への結束や組織観（国で言うなら国家観あるいは国家感）、相互激励の意欲を高めるだけでなく、はたすべき目標、最終ゴール、自らの役割を自覚、確認する効果を持つ。「何だ、自分の名前の2文字が含まれているではないか」と思い、毎週日曜日毎に午前中は農作業の手伝い、午後はこの映画を観るために劇場に足を運んだ事を覚えている。織田信長には多くの子供が居たようだが、4人目からは余り面倒身が良くなかったようである。信孝は信忠（長男）、信雄（次男）に継ぐ三男となって居るが、ものの資料に依れば命名の届け出が遅れて、本来は次男であったが三男となったとある。後に神戸具盛を養父として神戸家に移り、神戸信孝となる。神戸は三重県鈴鹿市の一地方で、歴史的にも吉良仁吉で有名な「荒神山の決闘」でもよく知られている。この決闘は明治になる2年ほど前の出来事で、博打の賭場と領地を巡る任侠博徒の戦いである。助太刀をした清水の次郎長の任侠道と、吉良仁吉が男としての名前を挙げた幕末の事件でもあるが、残念ながらこの戦いで仁吉は銃弾を受け命を失った。事の詳細は真偽入り交じっているが、このときの模様を書き留めた位田武左衛門の書が残っている。織田信長が本能寺の変で明智光秀に討たれた後、織田家は衰退し、時代は次第に豊臣秀吉、徳川家康の時代へと動く。「信長の野望」というゲームが一時大きな人気を得、有名になった。「信孝の野望」に例え「自分も同じように続け」と言う言葉を筆者に投げかけた知人もいた。在職中は職務に負われ、毎日が忙しく、家族や子供を顧みる暇や余裕も無かった。定年退職後はどうかと言うと、これまたやること、やりたい事が出てきて、身勝手に好きなことをしている。しかしそうした事が出来る環境に家族や協力者が理解を示してくれている事を考えれば、それに応えるだけの信念を貫く覚悟がなければならぬ。気を緩めることなく、自らのミッションを明確に果たす事が重要と心得ている。筆者の誕生日は10月24日で、年代こそ異なるものの、この日は国連の創立記念日である。物事をこじつけて理解することはしたくないが、なにか世界のためにできないか、と言うのがもう一つの心得でもある。ちなみに織田信孝（神戸信孝）の墓堤は三重県亀山市関町の福蔵時に祀られていると言う。生きた時代環境が違うが、一度は訪れどの様な心構えで生きて、その生涯を閉じたのかと尋ねると、何かしら答えが返ってくるような気がする。過去の人物が見ず知らずの人であっても、同名と言うだけで親近感を覚え、勇気づけられる。良い事は学び、持続してその教えを堅持し次世代に伝えることも技術移転や文化、伝統の継承とともにその時代を生きる年配者の重要な役割である。新しい事への挑戦、情報の入手、発信、提案、迅速な行動での対応でなければ、奉仕、貢献などは極めて無理で

ある。国際貢献するには、まず相互信頼による人間関係の構築が大切である。金銭には注意が必要。金は殆どの場合、諸悪の原因であることが多いし人間関係を壊す。一度壊れた人間関係を戻すには多大の年月を要する。時には元に戻らない場合もある。税金でも、それが手違いや気付かなかった軽度のミスでも、払い忘れて、あとで払っても罰則として追徴金が課される。それだけでは無い。失った信頼の代償は大きい。本報の論点は、かつてもそうであったように、偉人からその業績と生き方を学ぶ、事であり、ましてや同名となれば親近感や一種異なった想いすら感じる事が、自らの励ましや活力、やる気を起こさせると言う事である。有益な話であれば語り継ぐのも一案と考える。モチベーションを高め、生き方を学び、勉強のレベルでなく研究への独創的発想の豊かな人材育成教育に注力する意気込みは健在と自負している。。

織田信孝が生きた時代は戦国時代であり、信孝は信長の3男ではあったが、結果として他の武士と同様若くして命を絶つ運命になった。切腹の際、腹をかき切つて腸をつかみ出すと、床の間にかかっていた梅の掛け軸に臓物を投げつけたといわれる。武士の運命とは言え、斬り殺されるより切腹の機会を与えられることが武士の誉れと言われる時代であり、死への覚悟と、いつでも死ぬる勇気を持っていた。事態の推移により、個人の武士にとっては運、不運もあるが、いたずらに死ぬのではなく、責任の取り方の一つの方法としての武士の作法(Manner)でもある。切腹で死ぬのは苦痛を伴うので切腹と共に介錯人が苦痛を伴う前に斬首して、その苦痛を取り除く役割を果たす。織田(神戸)信孝が特段に偉業を成し遂げたわけではないと言う点では、高い評価を見いだす事は出来ないが、当時の武士達は、現在と異なり常に「真剣・本気」であったこと、人生を本気で生きていたことは確かである。現在は一般に4つの罠があると言われる。それらは、1) ハニー・トラップ、2) 金銭トラップ、3) 医療トラップ(臓器移植やウイルス感染)、4) サイバー・トラップ、がそれらだと言われる。人間の弱みにつけ込んだ落とし穴である。常に、最終的には自らの命を賭して責任を取ると言う「本気度」が今の時代の人には少ない。これも日本人の「アイデンティティ(Identity)」が大きく変わった一面である。ひとりの人間として生きるモデルとして、方法論はともかく「誇り(Pride)」と「気(貴)品(Dignity)」を持った生き方を選択したい。そのことが、自分がこの世に生きた証明となると考えている。



太平記英勇傳：丹部侍従平春高



神戸(織田)信孝像

([歌川国芳](#)作)、出典:いづれもウィキペディア